先生とお母さんへのエール　おわりに

「教師生活43年間を終えて、一番に思い浮かぶ人は誰なの？」

夫にそう聞かれました。真っ先に浮かんだのは、大貫昭子先生でした。

大貫さんと初めて出会ったのは、2007年４月です。麹町にある組合の会議室ででした。全教（全日本教職員組合）女性部の第１回常任委員会。彼女は東北ブロックから、私は関東ブロックから選出され、初の顔合わせでした。自己紹介から同じ年齢であることがわかり、同郷の福島出身であることから親近感を抱きました。

2009年10月、全国女性教職員学習交流集会が福島で開催されました。事務局長は大貫さんです。全体会の講演は高遠菜穂子さん（イラクボランティア活動家）をお呼びして、２日間568人の参加で成功させました。大貫さんは、３年間の全教女性部の常任を退任されました。

2010年夏に再会しました。日本母親大会が福島の地で開催されたのです。事務局として走り回っている姿がありました。彼女はいつもキラキラと輝いています。２年連続で大きな大会を成功させるのは、さぞかし大変だったに違いありません。福島の底力を見る思いでした。

そして、2011年３月11日の東日本大震災。福島は、地震と津波のほかに、放射能汚染に見舞われました。家も職場も失い、命からがら避難した日々は、過酷を極めたに違いありません。そうしたなかで、10月の全国女性教職員学習交流集会香川大会に駆けつけて特別報告をしてくれました。私が初めて全教の女性部部長として迎えた

大会でした。
　１章に所載した東京民報2015年11月29日号のコラムで彼女を紹介しましたが、自ら被災しながらも全国を駆け回って福島の今を伝え続けた人でした。「地震と津波は天災ですが、放射能汚染は人災です」、そう言って故郷の実態を告発し続けました。

　私は福島生まれで22歳までそこで育ちましたが、相馬には行ったことがありませんでした。東京電力福島原子力発電所は、存在は知っていましたが、見たこともありませんでした。
　大震災から２年後の３月９、10日に、現地を訪ねる企画のバス旅行がありました。ツアーのメンバーのなかで、教員は私一人だけでした。相馬に入ってから、バスの中に冊子を抱えた男性が入ってこられました。それこそ、福島県立高教組女性部発行のあの冊子『福島から伝えたいこと』でした。女性部から頼まれたということでした。
　「ああ、大貫さんに挨拶もしないできてしまったなあ。忙しい人だから、こちらにいないかもしれないなあ」などと思いながら、携帯電話をかけると、すぐにつながりました。
　「水臭いなあ。これから会いに行きますから、待っててね」
　と言って、休憩所にとんできてくれました。バスツアーの方々に彼女を紹介すると、瞬く間に冊子は売れました。さらに、皆さんのそれぞれの活動の場所に冊子を送ってほしい、と注文までありました。彼女の素早い行動力と誠実な人柄が人をひきつけ、事実の重みが運動を広げていくのだなあと感心しました。

　最後に会ったのは、全教が夏に開催する「教育のつどい」の全体会でした。彼女は、被災地の今を報告するために毎年参加していました。
　真っ白のノースリーブのワンピースが眩しく、ショートカットがよく似合っていました。
　初めて出会った頃はロングのカーリーヘアーでしたので、とても印象的でした。変わらないのは、背筋をピンと伸ばして全身で語る凛としたたたずまいです。
　「おっ、生きてたね」と私の軽口に、
　「癌がね、体中に転移するのよ。全身傷だらけよ」
　「でも、この髪は地毛よ。自分の髪がでてきたのよ」
　と嬉しそうに応じてくれた姿が、まるで映画のワンシーンのように思い出されます。
　「命の続く限り、福島を伝え続ける」と、言ったとおりの人生でした。享年62歳。つどいで会ってから５か月後のことでした。
　何度も手術を繰り返しながら戦い続けた大貫さんは、私の中で生きています。彼女に恥ずかしくない生き方をしなくてはと、今も私の背中を押してくれています。

　本を出版するにあたり、まず最初に大貫さんに報告をしたいと思いました。
　この本の１章は、東京民報に掲載されたコラム「美恵子先生の子ども・教育」です。
　このコラムが無ければ本はできませんでした。５年もの長きにわ

たり、いつも優しく励ましてくださった東京民報担当記者の上野敏之さん、編集長の荒金哲さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。大変お世話になりました。

　また、カバーの絵と本文のイラストは絵本作家・画家の石井勉さんです。石井さんのお描きになる絵は、優しくあたたかで心を包み込んでくださいます。私のつたない文章を引き上げてくださいました。本当にありがとうございます。

　そして、厚かましいお願いにもかかわらず、本書を快く推薦してくださった作家の早乙女勝元さんに深くお礼を申し上げます。

　最後に、あけび書房代表の久保則之さん、清水まゆみさんに心よりお礼を申し上げます。温かい励ましと適切なご指導・アドバイスのおかげで本書を出版することができました。

　皆様に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

２０２０年７月　　井上美恵子